

追 悼

私の心に残る笠原さん

藤 井 耕 一

昭和52年3月に定年退職してから私は、商学部の皆さんとお会いする機会はあまりなく、従って皆さんの消息について聞き知ることもないのであるが、たしか去年の3月末、恒例の商学部教授会懇親会にお招きをいただいた席においてであったと思うが、笠原教授がご病気で、暫く前から休講しておられることを知って、驚いたのであった。新学期からは出講なさるだろうと言う人もあったが、また一方には、そう楽観はできないようだとの話もあって、内心1日も早く快癒なさることを祈ったのであった。それから一、二回、新学期になっても休講を続けられていることを聞き、心配していたところ、去年10月中旬のある日、新聞で訃報を知り、がっかりしたのであった。ご生前同僚の一人として何かと厚意を寄せていただいた者として、お見舞の言葉ひとつ差し上げることもなくお別れしてしまったことが、悔やまれてならない。

笠原さんと私とは、専攻科目が違い、明大内での主として勤務する場所も、駿河台校舎と和泉校舎というぐあいで違って、はじめのうちは、余り付き合い・なじみはない間柄であった。笠原さんはいつも教授会で、新進気鋭の学者らしく、理路整然と、時に冷徹に意見を述べられるので、大ざっぱな考え方と乏しい表現力しか持たない私は、いつも圧倒される思いで、怖いなあ！とちょっぴり思ったこともあった。

その笠原さんが46年、学内の輿望を担って学生部長に選出され、それに伴って氏は、各地区担当の副学生部長を探されなければならなくなり、和泉担当の副学生部長の人選については、私にも意見を求められた。これがはじめて私たち二人が、当面の要件の外にも、互いに自分の考え方や感じ方をも率直に語り合う機会となった。そしてこの時はじめて私は、日ごろ、堅まじめで、ちょっ

ぴり怖いようにさえ思っていた笠原さんが、実際には、幅も厚み深みもあり、柔軟性に富んだ、温厚な人柄であることを知った。世に、人には添ってみよ……、という言葉があるが、正にその通りであると痛感した。笠原さんが今回むずかしい学生部長に選出されたのも、むべなるかなと思い、また同時に、この人はいずれは、学部のためにも大学のためにも、重要な人となられるであろう、と直感した次第であった。

笠原さんが学生部長を務められた46、7年という時期は、今では淡い追憶だけを残して、実際に大変だった一つひとつの事象は忘却の彼方に消えてしまったけれども、全国が烈しい学生運動に沸き狂った昭和40年代内の、一区間であった。学外的には成田空港問題・峡山差別裁判問題・沖縄返還協定反対問題・10月21日の反戦デー、その他数多くの問題があり、それらが互いに競合して、わが明治大学の周辺及び構内にも波及して、激しいデモやバリケードが繰り返され、学生集団と警察との衝突と、学生組織間のいわゆる内ゲバが頻発し、傷害事件也多発し、それとの関連で大学は学生会館を閉鎖しなければならない、必然の結果として学生は学館開放を要求し、時には強行突破もする、というような時期であった。この外に本大学固有の問題としては寮自治問題があり、特に、笠原さんの就任初年度46年には、実際には土壇場で見送られることになったけれども、47年度新入生からの学費の改訂がありそうだとの問題があって、必然的にそれに対して学生の烈しい反対運動が起った。それやこれやで大学は興奮のうずの中にあり、重要な会議もその性格によっては学内で開くことができず、われわれ教職員も、朝の出勤にあたっては、今日は果して無事に入構できるのだろうかと心配し、入構できればできたで、今日は1日平穩に仕事を終えられるだろうかと、不安の中に過す日の多い年であった。

こういう時に、学生の言うことを聞けない大学側と学生側との間に立って、取持ち役を果すということは、並大抵のことではない。学生の要求する団交やら折衝やらに、誠意を持って対応することで明け暮れる1年は、なみの10年にも匹敵したであろうと思われる。こんな中で笠原さんは、名学生会長としてその重責を果されたのであった。

私は不肖の身ながら47年2月に評議員に選出され、49年4月には、学務担当理事を仰せ付かった。そしてこの時の理事会は、50年度新入学生からの学費改訂は避けられないと考え、その可能性・限度などの検討を直ちに始めたのであるが、そのことを察知した学生会は、直ちにその反対・阻止の運動を展開した。そのために理事会は、教職員の皆さんに非常なご苦勞をかけ、特に私は商学部の皆さんに、自学部から出た者をかばうという皆さんのご厚意のために、大変なご迷惑をおかけする結果となったのであったが、笠原さんは、貴重なご経験から、何かとご注意くださり、恐らくは陰でも、私のやりいいようにと、何かと根回し・雰囲気作りをしてくださったものと、私は今でも思っている。この学費改訂の後遺症として、50年度全般にわたって学内がどよめき、学生による授業妨害などが繰り返され、特に商学部のある教授の授業が、執拗な妨害的とされながら、理事会としては何ら適切な手が打てず、教職員の方々にだけ無理なお願いをしていた時があった。そんなある時、50年度も終わろうとする頃であったが、笠原さんが私の肩をたたいて、新学期になったら、皆で協力して、正すべきは毅然として正しましょう、と言ってくださったことがあった。その時に、私や笠原さんの念頭にあったようなことは、理事会側で何もせず・できずで終わったけれども、氏のあの時の励ましの言葉は、今も鮮烈に私の胸に残っている。

51年2月、笠原さんは評議員に選出され、私も同時に再選された。私が第一回目に評議員になった時の印象は、教職員出身の評議員、いわゆる学内評議員は、評議員会での意見開陳が少ないのではないかということであった。ところが51年2月の改選で出られた学内評議員の方々は、だいぶ違っていた。皆さんの発言が活発で、学内の必要な事柄については、学外評議員の方々に、良く正しく理解してもらおうと努力された。そして笠原さんもその一人であった。51年9月には、氏は商学部長になられたのであるが、氏のこの2年間の任期は、私は途中から失礼したけれども、商学部内部にも困難な問題があり、まとめ役として非常に苦勞なされたことと察せられる。評議員会にもかかわりのある点もあって、商学部内の意見が評議員会に正しく伝わり、理解されるように、非

常に説明に苦勞しておられた。

氏はわが国保険学界の中堅学者として、重きをなしておられたことを聞いている。わが明大にとっても、ひとり商学部だけでなく、大学全体のためにも、いずれ重職を担っていただかねばならない人物であると、私は堅く信じていたので、その訃報を聞き、衷心惜しくてたまらない思いがしたのだった。私個人としても、心の友を失った思いである。かつてある機会に私は笠原さんに、いわゆる平均寿命とは一体どういうことなのか、どのようにして算出されるものか一向にわからないんだが、と言ったところ、氏は、いずれそのうちご説明しましょう、と言われたことがあったのだったが、それもそのままでお別れとなってしまった。